

神々の国の匠達

出雲大社神楽殿の大しめ縄を手掛ける
飯南町しめ縄クラブ



1 チェックを重ねながらの作業
2 細かい作業の連続
3 ワラを重ね合わせたくしていく
4 体育館の幅いっぱい大きさ
5 大しめ縄も最初はこの太さ
6 かざり縄づくり
7 しめの子は1つ500kgもある
8 立派なつり木
9 代表の星野敏幸さん

【大しめ縄づくりのはじまり】
現在、縁結びにご利益のある神社として、全国から多くの人々が訪れる出雲大社。この出雲大社で人々が最も目を奪われるものといえば、神楽殿に懸かる日本一の大しめ縄ではないでしょうか。この大しめ縄の制作を行っているのが、「飯南町しめ縄クラブ」の皆さんです。
このしめ縄クラブでは、昭和56年に神楽殿が建立されて以来、これまで5度の大しめ縄奉納を行っています。元々、頓原(花栗)に出雲大社の分院があったことが縁でしめ縄づくりを行っていました。神楽殿ができた際に「大しめ縄の制作をお願いできないか」と依頼されたのが始まりということでした。
今年「神話博しまね」が開催されることや、来年には「平成の大遷宮・本殿遷座祭」が行われるというところで、今回6度目の奉納を行うことになりました。

最初に手を抜くとだめ。何段階もチェックをしながらの慎重な作業の連続です。」
こう語るのは、大しめ縄制作を始めた当初から携わり、現在では代表を務める星野敏幸さん(花栗)です。
今回の大しめ縄制作では、約20名の会員が3月から作業を開始しました。まず、設計図の書かれたブルーシートの上で、しめ縄の表面に巻くコモを編んでいきます。このコモの出来栄によって見た目の美しさが大きく変わるといいます。コモ編みには特に気を使います。次に芯となる部分を作っていきます。最後にコモを被せます。これを2本作り、最終的により合わせると本体の出来上がりです。さらに本体の下側に取り付ける「しめの子」や、つり木と本体に掛ける「かざり縄」なども作ります。

【制作工程】

今回奉納する大しめ縄は長さ13.5m、重さ4.4トンもあり、これを制作するには気の遠くなるような地道な作業が必要です。
「きれいなしめ縄を作るには、

【資材集め】

しめ縄作りを使うワラ、特に表面に巻くコモの部分は美しさを追求するために、はで干しされたワラを使用しています。近年、はでが姿を消してきており、わざわざしめ縄用に、はで干しをお願いしています。

神々の国の匠達

出雲大社神楽殿の
大しめ縄を手掛ける
飯南町しめ縄クラブ



1 全員でのコモ巻き
2 笑顔の絶えない作業場
3 太さを微調整します
4 後はより合わせを待つのみ
5 力を合わせてのより合わせ
6 寸分の狂いも許されない作業
7 つり木の取り付け
8 しめの子の取り付け
9 架け替えられた新しい大しめ縄

大しめ縄をつくる「つり木」に使用するヒノキは、真っ直ぐで美しいことはもちろん、細かく切って運ぶことができないため道路に近い場所を探す必要があります。簡単には見つかりません。
「出雲大社以外にも全国の神社からしめ縄の依頼があり、資材集めには本当に苦労しています。」と、星野さんは語ります。

「出雲大社以外にも全国の神社からしめ縄の依頼があり、資材集めには本当に苦労しています。」と、星野さんは語ります。

【完成そして奉納】

奉納の前日となる7月8日に、大しめ縄づくりの最終段階の作業となる、重機を使って2本の縄をより合わせる作業を、みせん駐車場で行いました。2本の縄がより合わさり1つの大しめ縄となっていく姿は、まさに圧巻の一言です。これにつり木を取り付けると、長く続いた飯南町での作業は終了となります。この日の作業には、県知事や出雲大社関係者も駆けつけているなど、多くの見学者で賑わっていました。

そして翌7月9日、いよいよ奉納の日です。朝、飯南町を出発したしめ縄クラブの皆さんと大しめ縄は、一路出雲大社へと向かいます。
現地では、本体とつり木の締

【しめ縄への未来へ】

しめ縄づくりという素晴らしい伝統技術を継承していくため、しめ縄クラブでは町内外を問わず幅広く声がけを行い、多くの人に技術を覚えてもらえるよう取り組んでいます。実際、今回から参加したという会員もいるということで、技術の継承は確実に進んでいます。さらに、全国からの視察・研修も積極的に受け入れて、技術提供も行っています。

「全国的にしめ縄づくりの技術が廃れていっている中、飯南町で受け継がれてきた技術をいつまでも継承していきたい。」このように力強く語る星野さんからは、伝統の技術を受け継いだ者としての誇りが感じられました。